

令和 5 年 5 月 1 7 日現在

機関番号：14101

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K13003

研究課題名（和文）生成文法における文法化：「ルートと範疇の分離」の観点から発話動詞の通時変化を探索

研究課題名（英文）Grammaticalization in Generative Grammar: Investigating Diachronic Change of Speech Verbs Under the Root & Category Theory

研究代表者

齋藤 広明（Saito, Hiroaki）

三重大学・高等教育デザイン・推進機構・特任講師（教育担当）

研究者番号：00849044

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000 円

研究成果の概要（和文）：生成文法の枠組みにおける文法化現象（動詞や名詞といった語彙範疇に属する語が機能的・文法的な要素へと発達する通時的変化）の理論的研究に貢献した。本研究は、発話動詞の文法化に着目しながら、これまでの生成文法における文法化分析では扱うことのできなかった文法化のパターンを分析し、それらを網羅する分析を新たに提案した。加えて、形態論研究で提案された「ルートと範疇の分離」という仮説を文法化の分析に用いることで、この仮説の応用可能性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「文法化」というテーマは、記述文法・歴史言語学では最も研究されている課題の一つであるにもかかわらず（Hopper and Traugott 1993等を参照）、生成文法においては限られた数の研究があるのみである。したがって、記述文法の文法化に関する知見は、生成文法の理論的發展には活かしきれていないという現状があった。そのような生成文法において扱われていない記述文法の知見を生成文法研究の発展に還元したという点が、本研究の特筆すべき学術的意義として挙げられる。

研究成果の概要（英文）：I contributed to the theory of grammaticalization (i.e. diachronic changes where lexical elements such as verbs and nouns evolve into functional and grammatical elements) within the framework of generative grammar. Focusing on the grammaticalization of speech verbs, I analyzed grammaticalization patterns that had not been sufficiently addressed in previous generative studies. Additionally, by applying the root & category theory, which is proposed in the study of morphology, to analyzing grammaticalization, I demonstrated the applicability of this theory.

研究分野：言語学

キーワード：生成文法 文法化 発話動詞 補文標識 統語論

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景は、文法化現象(動詞や名詞といった語彙範疇に属する語が機能的・文法的な要素へと発達する通時的变化)が、記述文法や歴史言語学においては中心的な研究課題である一方で、生成文法においては一部の例外を除き多くの注目を浴びてこなかったことにある。本研究の予備的研究において、記述文法における観察の中に、生成文法内で仮定・提案されている文法化の分析では捉えにくい文法化のパターンがあることが分かり、そのようなパターンを理論的にどう分析するか、という本研究の中心的な問いが得られた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、文法化研究とは独立して提唱された理論である「ルートと範疇の分離」という提案を文法化研究に応用することで、生成文法における発話動詞の文法化の新たな分析を提案することであった。

「ルートと範疇の分離」は、語の構造に関する提案であり、現在形態論の分野でも広く採用されている仮説である(Halle and Marantz 1993, Pesetsky 1995, Marantz 1997等を参照)。この仮説によると、動詞や名詞などの語彙範疇に属する語は、(a)音韻と意味の情報を持つが範疇の情報は持たないルート(ROOT)と、(b)範疇を決定する要素(category-determining head)に分離可能であるとされる。本研究では、発話動詞の文法化を研究対象とし、この仮説に基づいて「文法化のプロセスには、範疇を決定する要素の喪失が関与している」という提案を行い、その妥当性を検証することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究の中心的な提案である「(発話動詞の)文法化のプロセスには、範疇を決定する要素の喪失が関与している」という本研究の提案の妥当性を検証するために、以下の二つの小課題を設定した。一つ目は、(A)「本研究の核となる提案の理論構築とその精緻化」であり、二つ目は(B)「より基礎的研究である、個別言語における文法化やそれに関連する引用文・埋め込み文の統語論および意味論研究」である。

(A)に関しては、本研究の提案が従来の生成文法における分析では予測しない文法化のステージ(変化過程)を予測することに着目し、通言語的なデータ収集を行うことで本提案で新たに予測されるステージに該当する要素や変化パターンが存在することを示そうと試みた。

(B)に関しては、個別言語に観察される発話動詞の文法化と関連する表現・現象を調査し、その言語・現象を扱う分析を提案するとともに、その分析がどのように(A)の理論構築に寄与できるかを考察した。

(A)・(B)ともに言語のデータ収集が研究方法の根幹であった。データ収集は、文献調査に加え、生成文法(理論言語学)で伝統的に用いられている母語話者の内省判断に基づく容認性判断の手法をとった。また、記述文法(伝統文法)の文献調査において、英語(もしくは日本語)以外で出版された文献を調査する際には、言語学の背景知識を十分に持ちながら、英語以外の言語を母語とするコネチカット大学言語学科の大学院生に翻訳を協力していただいた。

4. 研究成果

本研究の成果は、上に述べた二つの小課題である(A)「『発話動詞の文法化のプロセスには、範疇を決定する要素の喪失が関与している』という本研究の核となる提案の理論構築とその精緻化」と、(B)「より基礎的研究である、個別言語における文法化やそれに関連する引用文・埋め込み文の統語論および意味論研究」に対する成果として分類することができる。

(A)に関しては、本研究の提案を具体的な文法化の例とともに扱った論文が通時統語論研究を専門とする国際ジャーナル Journal of Historical Syntax に掲載された(Vol. 5(10), 2021年)。また ICU Linguistics Colloquium(国際基督教大学言語学コロキウム)においても本研究の提案に関する発表を行った(招待講演)。加えて、本研究の仮説が、従来の文法化研究では注目されることのなかった「発話動詞の文法化における間接目的語」に関して新たな予測をすることを発見し、これをまとめた論文“Losing a subject, keeping an indirect object: On the “semi-grammaticalized” speech verb in Meadow Mari”を Proceedings of the Linguistic Society of America(Vol. 7(1), 2022年)に掲載した。

(B)に関しても、日本語、中国語(マンダリン)、牧地マリ語など、語族を超えた様々な個別言語における文法化現象とそれに関連する現象に関して国際学会における発表を行った(the 32nd North American Conference on Chinese Linguistics (2020年)、the 46th Annual Meeting of the Penn Linguistics Conference (2022年)、the 96th Annual Meeting of the Linguistic

Society of America (2022 年)、the 16th Workshop on Altaic Formal Linguistics (2022 年) など)。また、これらの発表をまとめた論文も併せて出版した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 5件／うち国際共著 1件／うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Hiroaki Saito	4. 巻 1
2. 論文標題 The Size of sentential complements in Japanese	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The size of things I: Structure building	6. 最初と最後の頁 115-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Hiroaki Saito	4. 巻 5
2. 論文標題 Grammaticalization as Decategorization	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Historical Syntax	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18148/hs/2021.v5i1-13.37	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Hiroaki Saito	4. 巻 22
2. 論文標題 Selection and size of clausal complements [abstract]	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Proceedings of the 22nd Seoul International Conference on Generative Grammar: The Syntax-Pragmatics Interface in Generative Grammar	6. 最初と最後の頁 356-358
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Hiroaki Saito	4. 巻 26
2. 論文標題 How to (not) say to say	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japanese/Korean Linguistics 26	6. 最初と最後の頁 177-187
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Xuetong Yuan and Hiroaki Saito	4. 巻 1
2. 論文標題 Matrix shuo in Mandarin	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Proceedings of the 32nd North American Conference on Chinese Linguistics	6. 最初と最後の頁 361-368
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Hiroaki Saito	4. 巻 7(1), 5253
2. 論文標題 Losing a subject, keeping an indirect object: On the “semi-grammaticalized” speech verb in Meadow Mari	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Proceedings of the Linguistic Society of America	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3765/plsa.v7i1.5253	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 7件)

1. 発表者名 Hiroaki Saito
2. 発表標題 Decategorizing "say"
3. 学会等名 ICU Linguistics Colloquium (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hiroaki Saito
2. 発表標題 Losing a subject, keeping an indirect object: On the “semi-grammaticalized” speech verb in Meadow Mari
3. 学会等名 The 96th Annual Meeting of the Linguistic Society of America (国際学会)
4. 発表年 2022年

1 . 発表者名 Hiroaki Saito
2 . 発表標題 On the apparent complementizer in Japanese
3 . 学会等名 The 46th Annual Meeting of the Penn Linguistics Conference (国際学会)
4 . 発表年 2022年

1 . 発表者名 Hiroaki Saito
2 . 発表標題 Selection and size of clausal complements
3 . 学会等名 The 22nd Seoul International Conference on Generative Grammar (国際学会)
4 . 発表年 2020年

1 . 発表者名 Hiroaki Saito
2 . 発表標題 On the independence of syntactic selection: a view from Japanese
3 . 学会等名 The 28th Japanese/Korean Linguistics (国際学会)
4 . 発表年 2020年

1 . 発表者名 Xuetong Yuan and Hiroaki Saito
2 . 発表標題 Matrix shuo in Mandarin
3 . 学会等名 The 32nd North American Conference on Chinese Linguistics (国際学会)
4 . 発表年 2020年

1．発表者名 Hiroaki Saito
2．発表標題 On Linguistic Manifestations of Saying in Japanese
3．学会等名 The 16th Workshop on Altaic Formal Linguistics (国際学会)
4．発表年 2022年

1．発表者名 Hiroaki Saito
2．発表標題 Comments on “A Discussion about the Syntactic Structure of Parenthetical Expression I mean: From the interface of generative grammar and grammaticalization” by Siyu Li
3．学会等名 Encouraging Workshop on Formal Linguistics 8 (招待講演)
4．発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	University of Connecticut			